
Mail

kamitoki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mail

【Nコード】

N4891Z

【作者名】

kamitoki

【あらすじ】

恋愛小説。他サイトで一年ほど前に書いた作品。恋愛とはこうあって欲しい。

親父からのメールが、今日は届かなかった。夕方あたりから抱いていた違和感はもしかしたらこんな些細なことだったのかもしれない。文哉はふと思った。隣では美代が最近のお笑い番組を見ながらケラケラ笑っている。若手の芸人が動くモニタを、俺は薄ぼんやりと眺めていた。

親父からのメールが来ない。それは、ここ数年初めての経験だった。机の上の携帯のボタンを押す。サブディスプレイに映るのは青白い時刻表示、”22:43”。新着メールの文字はなかった。

外国で働く親父のメールは、今まで欠かすことなく毎日送られてきた。必ず写真が一枚添えられ、それは市場の様子やバーの様子、友人の写真など毎日てんでバラバラだった。俺はそんなメールの殆どを無視し気になる内容だけ返信していたが、いざ来ない日がくると、それは不思議と違和感に包まれるものだった。

俺と親父の仲は、基本的にあまりよくない。俺は親父を嫌っていた。母をこの日本に置き去りにして海外で働いている親父に、俺は子どもながら憤りを感じていたのかもしれない。母は正月とお盆にしか帰ってこれない父親をいつも待ちわび、俺と二人の食事の席でいつも父親の話をしていた。

「お父さんはね、遠い遠い海の向こうでも同じようにお寿司を食べてるんだって。お父さんの友達がお魚を生で食べるのにびっくりするのをお父さんは楽しんでるんだって。文哉だったらそんな意地悪しないよね」

そういつて、母は口元をおさえてクスクス笑う。それから決まってきた俺の学校での話になるのだ。

俺はそんな健気な母が好きだった。

母がこの世を去ったのは、俺が大学に入学して間もない春だった。突然だった。ついさっきまで笑顔を見せていた母が倒れ、その次の日には息を引き取った。親父は間に合わなかった。きっと母が最後に会いたかったのは親父だったに違いない。最愛の人の手に触れていたかったに違いない。そんな母の夢すらも、親父は叶えてやれなかった。

泣いた。泣き喚いた。心の奥底から込み上げてくる悲しさと沸々と湧きあがる怒りが涙を押し出した。罵倒した。母の幸せはなんだったのかと。どうしてこんな最後になってしまったのかと。俺は黙っている親父に喚き散らした。泣いても母は戻ってこない悲しさが、更に俺を追い詰めていた。

葬儀が全て終了した後、親父はまた海外に行くことになった。俺は一人この家に残る。出発する前日、親父は突然電話屋へ行くと言い出した。携帯電話をかうという。携帯電話を持っていなかった親父は、俺同伴のもとに電話屋へ向かった。そして、一番最初の暗号のようなメールアドレスと俺を残し、また海外へと飛び立っていった。

それから今日まで、欠かすことなくメールが届いた。活気あふれる市場の写真も気さくそうな親父の親友も、どれもこれも輝いていた。でもそれは親父の世界の中で輝いていた。俺の入り込む余地はどこにもない世界。ブラウン管の中のような、遠い遠い世界。

でも、それが今日はこない。遠い遠い世界を、今日の親父は見せてくれなかった。どうしてだろうか。俺は初めて、今まで送られてきた写真を思い出しながら親父を見ているような気がした。

去年の初盆、母の部屋の整理をしているときに見つけた綺麗な箱を思いだす。中には丁寧到手紙が収まっていた。それは長年、親父が母に宛てたものだった。その手紙の内容は、親父が異国で見たものの触れたもの、それを通して感じたこと、おそらく前の手紙で母が伝えたこちらの日常を羨む言葉、そして文の最後には会えない息子の様子をねだる言葉が記されていた。それが何年も何年も、途方もない日々の二人のやり取りがこの箱に詰まっていた。

母は、もしかしたら幸せだったのかも知れない。息子との食事の時と夫への手紙を書く時間が、彼女にとって家族が揃う時間だった。夫と息子を繋ぎ、そこに家族の幸せを創りだそうとした。触れ合うことは叶わない。けれどそれを受け入れ、肌では感じられない幸せを母はきつと感じていたのではないだろうか。その幸せが、夫から宛てられたこの手紙と、それらが丁寧に仕舞われた箱から滲み出ていた。

そして、親父もまたそれを創りだそうとしているのではないか。かつて妻と一緒に夢見た家族を、離れていてもお互いの気持ちを通じ合えるその幸せを今も創ろうとしているのではないか。それが、妻を今なお幸せにすることにも通じるから。

部屋には美代の笑い声がカラカラ響く。テレビの中から笑い声が響く。俺はテレビのリモコンを拾い上げ、電源を消した。

「あ、何するのよー」

突然画面が消された美代が抗議の声を上げる。その睨みつける瞳を、俺は、じっと見つめ返す。

「ねえ、テレビなんかよりも、もっと俺の方を見て…」

突然の齒の浮くような台詞に、美代は耳を赤くさせ視線を泳がせている。

俺は、いや、俺達は、この先一体何を創りだしていけるのだろうか。親父や母と一緒に創りだしたかったもの、そして創り上げたものは俺の中にも生きている。創りだすには長い年月が掛かるかもしれない。でも、どれだけ年月が掛かっても構わない。たとえ美代と別れることがあったとしても、それはいつまでも俺達の中で生き続け、満たしてくれるだろう。

そう、今度は俺達が創りだす番だ。

突然俺の携帯電話が鳴りだす。聴きなれた着信音を止め、俺は美代の手にも自分の手を重ねて微笑んだ。

e n d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4891z/>

Mail

2011年12月16日17時48分発行